

～ハツとしたとき出るエッセイ～



坊守のひとりごと



愛知県安城市和泉町中本郷41

2021年1月1日号

「羽織に託すねがい」

本龍寺には「同朋婦人会」という18名の法話会組織があります。昭和36年、当時の町内会のご理解を得て、1～9番組の各2名ずつ任期2年の役を受けて頂いて構成しています。月に一度の定例法話会と清掃奉仕、そして三大法要（春季・秋季彼岸会と報恩講）のお齋作りがメインの、お寺の「縁の下の力持ち」的大事な存在です。

昔の同朋婦人会さんは、報恩講のお勤めは全員着物でした。そして、お齋を作る時には洋服＋割烹着になって、またお勤めには着物を着てと、一日に何回も着替えをしておられました。それでは大変でしょうと、本龍寺紋が背中に付いた「報恩講羽織」が出来て今日に至っています。



約60年の歴史を持つ同朋婦人会なので、今では二代目・三代目の婦人会員を受けて下さる家は何軒もあります。以前こんな話を聞きました。同朋婦人会の役を終了したある方に、近所の方がこの報恩講羽織を譲って欲しいと頼みました。するとその方はこう言ったというのです。

「貸してあげてもいいけど、十年二十年後にうちの嫁に着せるから、あげられない」と。

同朋婦人会を経験して実感した教えを聞くこと、ご奉仕をすること、次の世代に伝えることの大事さを、自分ではなかなか直接言えないので、そのことを羽織に託すおばあさんの心がとても嬉しく、頼もしく思いました。

現職の同朋婦人会さんは第30代目。今年1月に任期が始まりましたが、コロナ禍のために自粛自粛で本来の活動が出来ずにいました。しかし昨年9月、秋のお彼岸で初めての**ほんぜん**（約220食）、12月の報恩講では準備を含めてほぼ一週間のフル活動に**ほんぜん**の本膳弁当作りは300食を超えました。それをほとんど全員が参加して下さい、楽しそうに前向きに勤めて下さいました。報恩講の反省会の時、こんな声を聞きました。

「**はは**義母がお寺、お寺と言っていた理由がよくわかりました。」

「こんな世界があるのかと、正直思いました。」

「亡くなった**はは**義母が、大変大変と言っていたのですが、今回役を受けて良かったです。」

「本堂での法話がとてもよかったと聞くので、早くCDで聞いてみたいです。」

2020年の報恩講ほど長く感じ、でも感動した報恩講は初めてでした。多くの諸先輩の、その時代その時代でのご尽力、ご奉仕が積み重なり脈々と続いている重さを感じます。お念仏の声を確かな確信を持って、次の世代に伝えていきたいものです。

坊守 樋口頼子